
エレイズとユエ

Lolo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレイズとユエ

【Nコード】

N9980X

【作者名】

Lolo

【あらすじ】

連載休止しておりましたが、ひよっこり再開しました。

炎の召喚士フレアで、名前でしか登場しなかったエレイズの婚約者ユエ。2人の出会いから、ユエの死までの話。終わりに近付くになるにつれて暗くなること間違いなく、相変わらず恋愛模様の描き方は下手くそです。ちょっと長くなるかと思えます。恋愛小説というより、ファンタジーとして読んでください。

今から7年も前となる。ユエ　ヨナの兄であり、後にエレイズフィアンセの婚約者となった男がダグラスの陰謀によって亡き人となるより3年前。

レミュエル王国は北に国境を接するセレウデリア王国との国境線に勝利を収め、その戦いで頭角を現した2人の上位魔法兵が上將軍にまで出世した。それがまだ10代のエレイズとウオーレンである。他の追隨を許さぬ圧倒的な戦闘能力を持ってセレウデリア騎馬部隊の第2軍を壊滅状態へと追い込み、レミュエルの勝利を決定づけた。2人の上將軍は当然、王城にて開かれた祝勝のパーティに招待を受けた。

この2人の反応はまるで正反対であった。

貴族諸侯に対し、礼儀を尽くすのが面倒で仕方がない上、賑やかな席を好まぬエレイズは憂鬱としか感じていない一方でウオーレンは元より目立つ事が好きだし、良い女でも探してやるうという事でかなり乗り気なのだった。

だが、例え気持ちは正反対であってもこの2人は友人というお互いしかいないものだから入場は肩を並べてであった。

大慌てで用意された正装に身を包むこの2人の上將軍は、それはそれは見応えがあった。大將軍となった今もエレイズ、ウオーレン、ラファインと並んで3強と呼ばれる裏で3大美將軍と噂される彼らである。7年前も、相当に美しかった。

男女でデザインの変わらない軍服を着ている事もあるし、体型の事もあって女性らしさにはまだ手の届かないエレイズであったが、それが寧ろ儂げな独特の艶を演出していた。また、その頃にはもう平均身長を頭1つ分飛び出して背の高かったウォーレンには軍服がこの上なくよく似合い、軍神のようだとさえ囁かれた。

「何だエレイズ、一晩中、壁の花になってるつもりか？」

場内も賑わってきた頃、既に何人もの女性から誘いを受けていたウォーレンはエレイズの元へと一旦戻ってきた。

「性に合わないんだよ。」

楽しんでくればいいんじゃない、ウォーレン？ ああ青いドレスのご令嬢なんて、なかなか素敵だと思うけど」

そんなそっけない対応で気を悪くしたり、拗ねたり、ましてやエレイズ本人を連れ出そうとするウォーレンではない。

「じゃあ、そうするかな」

と、気楽にその青いドレスの令嬢に声を掛け、あっという間にどこへ行ってしまった。

side エレイズ

ヒマになったエレイズがぼつと周りを見てみると、驚いた事に同種がいた。このパーティにすっかり疲れて、一刻も早く帰りたく

て仕方ない様子の青年。年は恐らく同じくらいか、青年の方が少し上。黒くて長い髪を持つ、暗い印象で華やかさは無いが清潔感のある綺麗な青年だ。誘いをかけようなどという意図ではなく、エレイズは声を掛けてみた。

「退屈そうですね」

一瞬、吃驚したように固まった青年だが、苦笑して頷いた。

「どうも、苦手なですよ」

何となく、若いのに老成した喋り方だ。

「エレイズ上將軍、ですね。今日の花形がどうしたのです」

「性に合わないの」

ウォーレンに言ったのと同じ台詞を繰り返すと、青年は意外そうにじっとエレイズを見た。無理もない。

これだけの美しさを持ち合わせ、そして知名度を手に入れて、パーティを楽しめない方がそもそもおかしいのだ。

「ねえ、あなた……この前、王城にいた？」

エレイズはどうも、見覚えのある姿だったのだがどうにも思い出せずそう尋ねた。

「ああ、それはきっと私の兄でしょう。ほら、あそこです。ユエと
いって……恐らく、来月の選定会議で大將軍位につくはずですよ」

エレイズはその視線を辿り、納得した。

美しい男だった。髪は恐らく、エレイズよりも長いのだろう。腰まであって、動く度にサラサラと流れる。華やかな笑顔で周囲の女性の頬をひたすらに赤く染めさせて、遠巻きにする人々の感動の溜息を誘っている。

「私は兄に連れられて来ただけです」

「一緒に行かないの？」

「いえ、私は……兄とは違いますから。ああやって、人々の中で輝く事など出来ませんよ」

エレイズは、家族が一人としていないから、そういうものなのかと、何となく寂しく思った。

「ねえ、あなたは？」

「え？」

「名前、教えて」

「ああ、申し遅れました。ヨナです。王立図書館に勤務しています」
そこで、エレイズの表情が輝いた。

「王立図書館？」

「はい」

「あの……もしかして、紹介状とかお願いできる？ 凄く行ってみたいんだけど、文官職の知り合いがいなくて……」

「そういう事でしたら、ご用意しますよ」

「ありがとうございます！」

エレイズの笑顔は、思わずヨナが目を細めてしまった程、眩しくて美しかった。

彼女は自分が興味を持っている学問分野 魔法生成の歴史
について話し始め、それはヨナが人より詳しい分野だったから、喜んでヨナの解説を聞いた。パーティ会場の一角でありながら、そこだけが学問所のようだった。

段々と話がうつり、用兵術についての討論が終盤に差し掛かったところで声が掛けられた。

「ヨナがそんなに夢中になって話してるなんて珍しいな」

「！ 兄さん」

エレイズは久方ぶりに、自分と対等以上の用兵術のセンスを持つ者との討論が出来たのを邪魔されて少々不愉快だったが、顔に出さぬように注意して会釈した。

「エレイズ上將軍、初めまして。ヨナの兄の、ユエです」

華やかな笑顔には、流石のエレイズも感服せざるを得なかった。

「お初にお目に掛かります。
近い将来の大將軍、だとか」

「ヨナが言ったのかい？ いや、周りが言ってるだけだよ」

しばらく3人で世間話をしたり、ユエがエレイズの美しさを称賛したりしていた。これがパーティの本来あるべき姿なのだが、学者肌でありこれでも武人のエレイズには嬉しくない展開だった。どうも、このユエという人物とは相性が悪いのかもしれない……というのが、エレイズのユエへの第一印象であった。

side ユエ

美しい容姿、明るい笑顔と細やかな気配りに長けた話しぶり。ユエという人物は社交の為に生まれてきたようなものだった。どのパーティ会場でも彼の行くところに人だかりができ、殆どの例外なく未婚の女性は 時には既婚の女性までも彼の目に留まろうと必死になる。

だがその日、セレウデリア国境線祝勝パーティはいつもと違った。

『あれは確か……』

エレイズ上位魔法兵、いや上將軍。

ユエははじめて、誰かの美しさに目を、そして心までを奪われた。

最初のうちは、放っておけばいつものように集まってくる女性陣の例に漏れずエレイズも自分との関わりを求めてやってくるだろうと考えていた。その時にでも、若いパーティ参列者のお約束にでも持ち込めば良いと、つまり樂觀視していた。

ところが、そうはいかなかった。

「何だエレイズ、一晩中、壁の花になってるつもりか？」

同期で友人のウォーレン上將軍がエレイズに話しかけていた。出来るだけ、エレイズから離れないように　いわば、他の男が近付いたら何気なく邪魔に行きやすい位置にいたから会話はよく聞こえた。そして、聞こえてきた言葉に驚いてしまった。

「性に合わないんだよ」

思わず、そちらを見てしまう。幸い、気付かれなかったがたしかに疲れているだけ、というような表情だった。名工の掘った女神像のように美しい彼女にはそんな表情も似合うが、出来るなら笑顔が見たい。

とはいえ、ユエには困った事になった。

パーティが嫌いという事なら、恐らく人見知りする性格ということ。誰かに連れられるなどのきっかけなくして、人だかりに近付くわけがない。

さて、どうするかと思っていると、彼女が動き始めたのでグラスを返しに行くふりをしつつ目で追う　と。

『ヨナ？』

エレイズと同じように、壁の花となっていた、弟である。彼は、兄のユエからすると勿体なくて仕方ないと思う程、消極的な性格。十分に整った容姿なのにいつも暗い顔をしているし、自分は大きく見栄えが良くないと思い込んでいる。

人々はユエが光、ヨナが闇のような正反対の兄弟だというのが……。ユエは、ヨナにも“光”になってほしくて、半ば強引に今回のパーティに連れてきたのだ。

その弟とエレイズがぼつぼつと話し始めたかと思うと、何といきなりエレイズは上機嫌になってにこにことし始めた。ヨナの方も、元来無口というわけではないがそれでも珍しい程によく喋っている。

『これは少しまずいかな』

ヨナに、女性への積極性があるとは思われないが放っておけばいつの間にか2人の世界にひたって話し込むだろう。それはユエにとってしてみれば、全く、面白くない。

『いや、これはチャンスか』

そう思う事にして、エレイズとヨナの方へ向かう。弟に声を掛ける次いで、と見せかければ自然な接触が可能と考えたのだ。

もはや、何か、任務のようになっているがユエは驚くほどに必死なのだ。

「ヨナがそんなに夢中になって話してるなんて珍しいな」

「！ 兄さん」

よほど、話に集中していたようで、ヨナは驚いたようにユエを見た。エレイズは形式的に会釈する。

「エレイズ上將軍、初めまして」

ずっと見ていたけれど。

「ヨナの兄の、ユエです」

一番好感を持たれるであろう笑顔に向けたユエ。エレイズは少しだけ頬を赤らめた。手応えを感じたユエ。

「お初にお目に掛かります。

近い将来の大將軍、だとか」

こんな型通りの会話を望んでいるわけではないが、型通りに返す。

「ヨナが言ったのかい？ いや、周りが言ってるだけだよ」

正直なところは自分でも確実だと思っている。

その後 あくまで本気で エレイズの美しさを褒め称えたりと、努力をするも、とうとうユエはエレイズがヨナに向けていたような笑顔を引き出す事は出来なかった。

いつもならここで、この人とは相性が悪いのかと諦めるが、決し

てそうならなかった。というより、ユエが自ら誰かを求めたのは初めてである。諦めるものにも、いつでも向こうから人がやってきていたのだ。

取り敢えず、何とか連絡先と勤務先の詳細を交換し、いつか食事でもとは言っておいた。恐らくエレイズは社交辞令ととるだろうが、別に実行してはいけない道理もない。ユエの密かな戦いがその日、始まったのである。

1 (後書き)

ちよつと意外なスタートでしたか？ エレイズは結構、冷めてます。とつくに判ってるよ、という方もいらっしやるでしょうが(笑)。

2 (前書き)

美しいモノは徹底的に美しく書く主義であります。ちょっと(いや、かなり)くだいのはご勘弁あれ。

side エレイズ

上將軍となつたエレイズは、レミュエル王国南方のフォーレン地方の管理を任された。大將軍の持つ城とは違って、あくまでも国から与えられる要塞兼住居といったものだが、そこらの屋敷とは比べものにならない建物の責任者になった。

「エレイズ上將軍、封書が届いています」

小姓のシンが、執務室へやってきた。

「うん、入って大丈夫」

「失礼します」

エレイズの執務室は、綺麗に片付いている。エレイズがきちんとしているのではなくて、まだ12歳の少年小姓のシンがとてもしつかりしているのだ。彼はエレイズが執務室を空けている時間を使つてあつという間に室内整備をしてしまう。

木製の重厚なデスクが置かれており、その上には幾らかの書類と筆記具のみ乗っている。小会議用のテーブルも部屋の中央にはあつて、ソファが向かい合わせにある。

「誰から？」

「ユエ大將軍です」

「……？」

エレイズは首を傾げながら受け取った。てっきり、最近王立図書館の紹介状を送ってもらい再会してからというもの、手紙で近況報告を兼ねた学問討議を行っているヨナからかと思っていたのだ。

「兄の方が」

封書を開けて、中を見たエレイズは少し考えてからシンを見た。

「明後日の予定って何かあるっけ？」

「午前中、地方評議会の視察のみです」

「夕食、誘われちゃった」

シンはちょっと驚いた顔をしていたが、彼もユエの噂は知っている。とても感じの良い美男子と聞いていて、敬愛する上將軍の相手として悪くはないと思うから

「スケジュール上は可能であります」

と答えた。イイ笑顔で。

エレイズはそれをじっと見てから苦笑すると、短い返事を書いた。

「送っておいて」

「かしこまりました」

side ヨナ

今から二月ほど前の兄の相談を思い出しては、ヨナは笑いそうになっ
てしまふ。

あの、女性関係で怖いものは無しに見えるユエがどういう訳か沈痛
な面持ちで、女性関係など一切関わりを持たない自分に相談を持ち
かけてきたのだ。

それは、エレイズとどうやって仲良く話すようになったのかから
始まって、彼女の好きな物に関する情報は何か無かったか、とか紹
介状を送る次いでに色々と探ってくれとか。恋人はいそうかとか、
その候補はとか……。

取り敢えず、ヨナは王立図書館に通い始めたエレイズとより親し
くなる事に成功したし、学術的な文通も交わすようになったから兄
に教えてやれる情報はかなり多かった。

「ヨナ！ 聞いてくれっ」

ユエが大喜びのていで王立図書館に駆け込んできたのは、エレイズへの食事の招待に対する返事が返ってきてすぐ。大將軍になったユエは王都に城を持つようになったから、王立図書館には1時間程度で行けるのだ。

「嬉しそうですね、兄さん」

大体、理由は判る。成功したのだろう。

「エレイズからOKの返事が来た」

「場所は決めたんですか？」

「ああ。【星の海】にした。お前のアドバイス通りに」

「恐らく、エレイズ上將軍も気に入られると思いますよ」

ヨナがエレイズの数々の発言から推測した、彼女の好む王都の料亭をアドバイスしたのだ。外装、内装は派手過ぎてはいけないし下心が丸見えの雰囲気には充ち充ちた場所もよくない。清潔感があって、質素ながら上品で、尚かつどちらかというと大衆向けの店が良いとヨナは勧めた。それから、エレイズがまだ10代で酒を飲まない事を忘れてはいけない。幸い、ユエは酒好きではないから飲まなくても差し支えない。本気であるところを見せるつもりなら、酒は飲まない方がいいというのもヨナの勧めである。経験は無い癖に、一般論の集大成から限りなく完全に近い計画を立てる恋の作戦参謀にユエは全面的な信頼を置く。また、このように協力を惜しまないでくれるならヨナは全くエレイズに気はないのだと確信もできていた。

「そついえば兄さん」

ヨナは、思い出して、結果は分かっているが聞いてみる。

「王立図書館の利用者の方……中級貴族アーベルン家のミシエル嬢が兄さんの仲を取り持つてくれないかと頼んできたんですが」

「丁寧に断りしておいてくれ」

「ですよ。既にそうしておきました」

ユエは愉快そうに笑った。

「お前が一番の理解者だよ！」

実は、ヨナにそのミシエル嬢のような頼み事をしてくる利用者が絶えず、彼は少し困っているのである。ここで、ユエに公的な恋人が出来ればそれが収まるかも知れないと少し期待しているのだ。しかも、相手は上將軍。身分的にも不足はないどころかピッタリである。この兄弟は平民生まれであるから、相手の家柄などは問題とされないし。

「ねえヨナ、ウォーレン君はどうなのかな？ それから、ラファイン君」

「あのお二人は、あくまでも友人という位置をずっと保っているようですよ。ウォーレン殿は……言うなれば自由奔放な方で、決まった女性は作らず好きにやっているようですしラファイン殿は逆に、家柄が家柄ですから女性関係に関しては潔癖過ぎるほど慎重です。どちらも、エレイズ上將軍と特別な関係になる可能性は極めて低いかと」

ユエはほっとしたように笑う。

弟のヨナから見ても、兄は本当に美しい。美しいものには3日で飽きると言われるが、生まれた時から見ているはずのヨナがユエの事を美しいと思うのだ。どうやって他の誰かが飽きる事が出来よう。

エレイズも、容姿に関しては取り敢えずユエに好印象を抱いたに違いない。だが、性格の方がどうなるかはヨナにも解らない。

エレイズは武官であるが、政治や権謀術数、それから用兵術、更には歴史学に非常なる興味を示す学者気質のところがある。興味の照準が、文官のそれなのだ。ヨナと話が合うという所でそれは証明されている。ユエも、頭は相応にいいからそれらの知識は漏れなく持っている。しかし、情熱を持ってそれを語れるかという点と解らない。あくまでユエは武官気質であるから。実戦魔法と用兵術までなら、十分に知識欲の旺盛なエレイズを楽しませる事が出来るだろうがそれ以外となると解らない。というか、恐らく今、王城に勤務しているどの文官もエレイズの話には着いていけず、曖昧に相づちを討つか、知ったフリをする羽目に陥るだろう。

『厄介な方に惚れ込んだものですね、兄さん……』

side エレイズ

ユエより夕食の誘いがあった次の日、侍女達は大騒ぎであった。

日頃、服といえば軍服が動きやすく、女性らしさのない簡易な部屋着しか着ないエレイズの服装について語り合う機会が生まれたのだ。

「やっぱり、エレイズ様には寒色が似合うわ」

「そうかしら？ 華やかな……赤やピンクもきつとお似合いよ」

「うっん、何でも似合うから迷うわね」

「丈は？」

「レデイらしく足丈がいいんじゃない」

「でも、まだ10代と折角お若いのだから。短くてもいいと思うわ」

エレイズは、城内に雇い入れる使用人を最低限の人数にまで削っていて城内の清掃も見習い兵に手伝わせているくらいだから、侍女も一桁しかない。それでいて、こんなに賑やかになっている。

エレイズはその様子をシンから教えてもらうと、苦笑した。

「何でそうなるのかなア。上將軍と大將軍が食事するだけなのに。

……というか、軍服で行こうと思ってた」

「それは駄目ですよ」

12歳になったばかりの、可愛らしい少年小姓は言う。

「一般の客も入る店に行くわけでしょうし、ユエ大將軍が私服でいらっしゃったらどうするんです。男性が軍服で、女性が私服ならまだしもその逆は気まずいですよ」

非常に常識的かつ説得力のある話だったのでエレイズもすぐ折れた。

そして、翌日。午前中は視察の後、官僚達と会食を行ったので帰ったのは午後3時にもなる頃という頃だった。

「エレイズ様」

執務室に戻ったエレイズのところへ、少々興奮した様子の子ンがやってきたのはその1時間後。

「ユエ大將軍はお迎えにいらっしゃるそうです」

「……どうやって？」

思わず問い返してしまった。

待ち合わせは午後7時に【星の海】だったのだが。だから、もう少ししたら着替えて出掛ければいいと考えていたのに。ちなみに、貴族の女性は身だしなみを整えるのに軽く半日はかけるがエレイズは多忙な上將軍だし服も奇抜なものではなく1人でも着れるようなスタンダードな、裾の詰まった青いロングドレスだし化粧もあまりしないので時間が掛からない。

「馬車のご用意をしたそうです。……というより、エレイズ様、どうやって行くつもりでいらっしゃったのですか？」

「アイス・ウルフに乗って」

「……ドレスでの移動という事をお忘れになっ
ていらっしやりませ
んか？」

「駄目かな？」

「服と髪が乱れてとんでもなく色っぽくなるか
もしれませんね」

12歳の少年の発言だろうか、これが。

「……やめとく」

「兎に角、こちらへ向かっていらっしやる
そうですから。まあ、あ
と2、3時間でしょう」

「判った」

エレイズは着替えるのでシンはさっさと部屋を出た。

side 二エ

馬車でエレイズの居城まで迎えに行くとい
うのもヨナの提案だっ
たが、考えるほどそうして良かったと思
う。こうすれば当然、帰り
も送っていく事になるうから必然的に共
に過ごす時間が増える。

馬車が進むにつれて、森林地帯となっ
ていく。まだ夕方の早い時間
なので明るい
が、夜は真っ暗になり
そうな人気の無い風景である。
辛うじて引かれている馬車道を通
っている。段々と、森が開けると

見えてきた。フォーレン城である。大きい城ではないが、一番古典的かつ格調高い尖塔の聳える城だ。城壁は白く、窓が多い。城門は今も開いていて、衛兵が見張りとして立っている。そこから離れたところにも何名かず組になって巡回しているから、壕の無い低い城壁の城だが警備に問題はなさそうだ。

衛兵達は話を聞いていたようで、馬車を見ると大して警戒する事もなく形式的に進行を止めた。

「どちら様で」

「ダークヒル城の大將軍、ユエだ」

「お通り下さい」

はっきり言って、ユエを他の誰かと間違える事はまず無い。弟のヨナであっても、顔を堂々と出して身代わりになることは出来ないだろう。それだけユエの美貌は男性とは思えない程に群を抜いた、完成されたものだったし雰囲気からしても誰も真似できない。

馬車が中庭まで進み、ユエはそこから降りた。迎えに出て来たのは、まだ10代に入ったばかりと思える黒い短髪の可愛らしい少年だ。格好から推測するに、小姓と思われる。

「お待ちしておりましたユエ大將軍様。エレイズ上將軍付きの小姓シンでございます。」

主はもうしばらくでいらっしやいますので、控えの間にてお待ち願います」

「わかった。……そうだね、早く来てしまった」

照れたように微笑むユエに、シンもにっこりとした。

シンは、自分の忠告が完璧に的を射ていた事をユエの姿を見ると知った。彼は軍服では当然なく、黒いカジュアルな雰囲気のスーツをだらしなく見えない絶妙な具合に着崩して、中には彼だから似合う白いフリルシャツを着ている。

豪華ではないが上品に整った控えの間にユエを通したシンは紅茶を淹れながら、こっそり観察していた。変わった趣味があるわけではないシンも溜息をつきそうになる美しさである。長い髪は優に腰まであるのだろう。射干玉めはたまのように艶やかな輝きで、燭台の炎をゆらゆらと映していて神秘的に見えた。瞳は黒真珠。目の形は綺麗なアーモンド型で、女性のように大きい。姫君と勘違いしてプロポーズするどこかの王族がいても笑われないだろう。

そんな彼はまた、白磁の頬をほんのりと紅く染めている。

どう考えても、エレイズと会う事を心待ちにしているようでシンは少し、他人事ながら得意な気持ちになった。自分が10になった時から仕えて、様々な偶然が重なり専属小姓を務める事になった女将軍は、神のように美しい大將軍の心をととう射止めたわけだ。

『エレイズ様も、女神のように美しいのだから。お二人で並ぶと、とても調和がとれる気がするな』

その光景を楽しみにしながら紅茶を淹れ終えたシンは壁際で待機す

る。

「シン君？」

「は、はい」

声を掛けられるとは思っていなかったなので、身体をびくつかせてしまった。

神の彫像は何を言っかと思ったら、にっこりと笑った。

「美味しいよ。紅茶淹れるの、上手なんだね」

「……恐縮です」

シンは真っ赤になって頭を下げた。

同時に決定した。

『例えどんなにエレイズ様が消極的でも、ユエ大將軍とエレイズ様が結ばれるように最大限協力しよう』

「お待ちせしました、ユエ大將軍」

丁寧に礼儀を尽くし、エレイズは低頭してから控えの間に入った。すぐに立ち上がったユエは、うっとりとその姿を見た。

「いや、僕が早く来てしまったから。」

……本当に、美しい」

エレイズは少し笑った。

「大將軍に言われても、冗談にしか聞こえません」

シンは「そんな事ありませんよ！」と勢いよく叫びそうになるのを必死で堪えた。

シンの予想を遙かに超える美しさだった。

光沢のある、明るい青の生地ドレス。胸から上の肩、腕、背中を露出させたベアトップで、スカート部分には波のように緩やかなひだが幾つも重なっている。髪は高い位置で一纏めにされ、顔周りに少し残されている。緩やかなウェーブが彫像のように整った顔に愛らしさを加えてより一層魅力的にしていた。

うっとりしたシンに見送られて、神々しい2人は出掛けていった。

3 (前書き)

読んでくださってる方には、ほんと申し訳ないですけど……自己満足の塊になってきました。何が面白いか自分でも判らない……。

「城主の仕事はどう？ もう、慣れた？」

まずは、仕事の話から。

「なかなか難しいです。特に俸給が」

小さく笑うと、花のように美しく、合わせて笑うのを忘れてしまった。

「まあ、エレイズ上將軍はきつとまた近い内に大將軍になるだろうから」

「それにはどこかの席が空かないと」

「おっと、これは不謹慎だった」

どうやら、警戒心は解いてくれたようでその後は滞りなく……一般なものであるが……会話が続いたのでユエはほっとしていた。普段なら決してこんな心配はしないのだが。

「王立図書館に入り浸ってるとか」

「入り浸ってる……ヨナが言ったんですか？ ちゃんと仕事もします」

拗ねたように言うのが可愛くてたまらない。

「判ってる、判ってる」

笑いながら弁解した。

「学問に興味があるのに、何故、武官に？」

「私、自分の出生が判らないんですよ」

驚くほどあっさりと言うものだから、大した問題と本人は考えていないようだがユエにしてみれば、あっさり言う事ではない。

「判らない……」

「親が誰か、生まれた国がどこなのか……」。

気付いたら、レミュエル王国の辺境、森で営んでる小さな料亭の夫婦に育てられてたんですよ。その2人が何とか、国籍を取得してくれましたけど、文官になるには色んなものが足りなかったんです。だから、力さえあれば……今のように、出世できるし地位を追われる事もない武官を選んだわけです」

質問してばかりだが、ユエの口からは質問しか出なかった。

「なぜ、武官に？ 育ての親の料亭を継ぐとは考えなかったの？」

「実は、ウォーレンとは幼なじみみたいなものでして。

彼は真正正銘のレミュエル生まれ、レミュエル育ちなんですけどやっぱり辺境地帯に住んでたんです。簡単に言うと、あいつに誘われ

たわけです。平民の田舎者が受けて受かるような試験じゃあ、どうせないだろうから……って言われてね」

「ところが受かった？」

「他の受験者の酷いこと。ユエ大將軍も思いませんでしたか？」

「うん、僕も確かに失望した」

思い出す。これで合格なのかと驚くような、低レベルな魔法を得意げに披露する貴族の子息達。

「まあ、それでもって若気の至りです。殆ど同期のラファインと知り合った事もあるんですけど、我々でレミュエルの軍を変えよう、なんて」

ユエは笑うエレイズを、真剣な眼差しで見た。

「本当に、出来ると思う？」

「……え？」

「レミュエルの軍を、変える事」

ユエの密かな切望であった。しかし、諦めていた。

貴族のたまり場と化している、腐った、弱体化した軍部。国境警備軍が平民ばかりなのだが、こちらが優秀なお陰で国境戦は今まで勝ちを収めていると言えるくらいだ。もし、大規模な侵攻を受けたら、レミュエルは本当に、危ない。

「ラファインはまだその情熱に燃えています。ウォーレンもきつと」

「君は」

「私は……」

苦笑した。

「取り敢えず、今のままでは駄目ですね。少なくともラファインが
大將軍にならなくては。」

バーフォンハイム家出身の彼が動けば、嫌でも多くの貴族が動き、
変わり始めます。」

だから、私やウォーレンばかりが大將軍になっても意味がない。い
え、なれないでしょう、今の段階では。実力の事もあるし、政治的
な問題もある」

ユエは熱心に言った。

「僕は、レミュエルの軍を、何とかしたいと思ってるんだ。ずっと、
思ってた……。君達が同じ事を思っていると聞けて、本当に嬉しい
よ」

「じゃあ」

エレイズは、にっこり笑ってから照れくさそうに言った。

「期待していてもいいですか？ ユエ大將軍がこれから、軍を変え
ていくって」

「君が応援してくれるなら、何でも出来る気がする」

「……あの」

エレイズは、自分が何を言いたいのか一瞬判らなくなっただように固まったが、口がその後は勝手に動いたようだ。

「エレイズと、呼んでください」

目を丸くしたユエだが、本当に嬉しそうに頷いた。

「ああ、エレイズ」

「……変なこと言いました」

「仲良くなれたみたいで嬉しいよ」

「……」

そろそろ日が落ちていたから、エレイズの頬が耳まで真っ赤に染まったところにはユエは気付かなかった。

「では、テレパスで呼びますからよろしく」

「お待ちしています」

ユエが御者にそう頼むと、大將軍と上將軍は王都の外れにある小洒

落た飲食店【星の海】に入った。混んでいるわけではないが、そこに人は入っている。

「すみません」

「あ、ご案内致します」

予約をしていたユエです……と、彼は言おうとしたのだが流石、王都の女性。一瞬でユエを確認すると営業スマイルを日頃の7割り増しにして2人を案内した。

「有名ですね」

「大將軍になったから、かなあ」

ところが、そういう訳でもない。王都の女性に石を投げれば、彼が王都に初めて現れた日から彼を記憶している者に、まず当たる。

「ちょっと、あの店員さんの目が怖かったなあ」

エレイズは小さく笑った。メイド達が気合いを入れた所為で、すっかりデートのような格好になってしまっているのだ。女心に嫉妬しない方が間違っているかもしれない。更には、エレイズは現在、王都で顔は殆ど知られていない。

『どこの誰だか知らないけど、ちょっとユエ大將軍に誘われたくらいで調子乗らないでよね!』

という視線が、恋人とテーブルに付いている女性からも飛んでくるから今日、ここでデートを計画した男性陣は可哀想だ。……考えよ
うによつては、彼女の視線を追うことで何の気後れもなくエレイズ
を眺められるという特権も彼らに与えられたわけだが。

兎に角、この2人はよく目立った。彼らのテーブルに料理が運ばれ
て来る度に振り返るのが、客達の習慣になってしまったかのようだ。

「綺麗な店ですね」

客達の事は一切無視する方向でエレイズ。

「名前の通り……天井が星空みたい」

「喜んでもらえて良かった」

エレイズの声はかなり明るく、やはりどんなに達観した雰囲気でも
女の子の部分はあるようだ。それを恥じるようにエレイズは苦笑い
し、話を移す。

「料理も美味しいですね。知ってましたんですか、ここ？」

「来るのは初めてだよ。ちょっと、頭の良い男にエレイズ上將軍を
デートに誘うならどこがいいか、一緒に考えてもらったんだ」

「デート……」

顔を赤らめるところが、可愛くて仕方がないと思うユエ。

「酒を飲まないというから、こついうところの方がいいと思って。紅茶が好きなの？」

「そうですね……何で？」

何で判るのだと首を傾げると、ユエは微笑んだ。

「可愛い小姓のシン君は、とても紅茶を淹れるのが上手かったから。鍛えられてるのかなと」

「そんな無茶な要求は、別にしてないです。シンのご両親が、紅茶大好きだったそうで淹れ方を小さい頃から教え込まれてみたいですよ。あの子が淹れてくれる紅茶を飲んだら、外で飲みたくなくなります」

「だからコーヒー？」

「ええ。」

割と、食べ物の好き嫌いはいしませんが。紅茶だけは無駄に舌が肥えてしまったようで

「シン君はいつから？」

「2年前に拾ったんです」

「……は？」

もう既に何度か、エレイズの単純明解過ぎる言葉に首を傾げるとい
うのをやっているユエ。またやってしまった。

「あまり、誰かの話を勝手にするのは好きじゃないので簡単に言う
と……」

エレイズが語ったのは、簡単とはいえ中々に驚くべき物語だった。

2年前、エレイズは将校になったばかりであった。訓練も兼ねた
国境への遠征の帰りに、彼らは夜盗に襲われている村を見付けた。
兵が疲弊している訳でもなかったし、見逃したとあつては厳罰もの
であるからエレイズとその500名の部下は夜盗を取り締まった。
比較的、早い段階で対処したために被害は大きなものにはなってい
なかつたが死者も当然、いた。その数少ない死者の内、2人が村の
中でも特に裕福だったシンの両親。シンも怪我を負っていて、それ
がかなり深かつたからエレイズ達は応急処置を行い、王都へと連れ
て行った。そこでシンは一命を取り留め、5体満足で元氣を取り戻
す。

だが、問題は彼が家族と家を失った事。命あつての物種ではある
が……。村は全体に貧しく、シンの家はかなり特別だった。養子を
受け入れて育てられる環境が整った家は生憎なく、居場所が無くな
った彼をエレイズはあっさりと見習い兵として雇い入れると言いつ
たのだった。最初のうちは、兵士となるべく魔法にも剣術にも手

を出していた彼だがそれよりも、何よりも給仕係としての手際の良さ……そして、彼の淹れる紅茶の美味さにエレイズは注目し、彼を一般兵見習いとしてではなく小姓として雇い始めた。給仕の手際に加えて、書類整理が得意で物覚えがよく、子供ながらに弁が立つ彼をエレイズはあつという間に気に入り、いつのまにか専属小姓にしていた、という事だ。

「まあ、弟が出来たみたいで嬉しかったのもあります」

エレイズはそう締めくくった。

「家族、いないので……憧れたんです」

「そうか」

ユエは笑った。

「お互い、良い弟がいるわけだね」

「ヨナですか？ ……生意気に思ったりしないんですか」

単純な好奇心のようだ。

「まあ、ちょっと頭が良すぎるかな。僕の頭は凡庸なものだから時々羨ましい」

「……でもユエ大將軍は、誰にも負けないものをたくさん持つてるじゃないですか」

それを聞くとユエは少し、意地悪そうに笑った。

「是非、教えて欲しいな」

しまったと、エレイズは思ったが、もう遅い。

「その……綺麗なお顔だし、それが無くとも人を引きつける魅力と
いうか……。」

あと、大將軍の笑顔を見ると何だか……安心します。
勝手な事を、失礼しました」

『……殺し文句だ。彼女、自覚してるのかなあ』

ユエは平静を取り繕って、自制心を保つのに四苦八苦しただ拳げ句、
ようやく落ち着いていた。

「そろそろ行くっか」

「そうですね」

「今回は僕が呼び出したんだし、僕が払うね」

「そんな、悪いですよ」

「今回は、ね」

「……」

非常に自然な流れで、次回の約束を取りつけられてしまった。

*

「こんにちは」

王立図書館が混み合うのは、週末の午後くらいであり後はぼつぼつと返却にやってくる者や時間つぶしにやってくる者が殆どなので職員はなかなかヒマを持て余す。

「返却、お願いします」

ヨナのところにやってきたのは、見慣れぬ10代を少し越えているかという少年だ。すっきり短い黒髪で小柄、顔立ちはどちらかというとまだ可愛らしい。

「ええ、どうぞ」

ヨナが軽く微笑んで言うと、とことこ、という風にやって来て本を出した。それを見てヨナは、思わず少年を見た。それらは、先週エレイズが借りた本であった。

「失礼ですが、あなたは？」

「僕はシンと申します。エレイズ上將軍の専属小姓として働いています。現在、上將軍が多忙ですので代理で返却に来ました」

「成る程、そうでしたか」

ヨナが返却処理を終えるのを待って、それから他の利用者がいない事を確認してからシンは言う。

「ヨナさんは、ユエ大將軍の弟さんなのですね？」

「ええ、そうですよ」

「率直に申し上げますね。」

僕はどうしても、エレイズ上將軍とユエ大將軍の仲を成立させたいのです

ヨナは流石に驚いたが、同意見であったので頷いた。

「ですが、エレイズ上將軍は控えめですしユエ大將軍も慎重になりすぎていらっしやるように思えるんです」

「そうですね。兄は……今のところ、エレイズ上將軍に嫌われぬ事を第一に動いていますから」

「だから、ヨナさん。」

僕がエレイズ上將軍の情報をヨナさんに伝えますから、ヨナさんは僕にユエ大將軍の情報を教えてください。多分、あの状態だとお互いに踏み込んだ質問はしれないと思われまますから……。

相手の事が判った方が、自信がつくし対策も出来まますでしょ？」

ヨナは思わず笑ってしまった。勿論、好意的な意味で。

「面白いですね、それは。判りました。大抵、平日の午前中は今日のように時間を持て余していますからお話しも出来るでしょう」

「じゃあ、エレイズ上將軍の代わりに僕が本を返しに来る事にします」

シンはにっこりした。

「それと」

メモを出した。

「この本をお願いします」

「判りました」

ここに「弟同盟」が結成された。

4 (前書き)

話の進行係が可愛い小姓のシンになってきました(笑)。

「凄いですねえ。ヨナさん、僕なんかいなくってもエレイズ上將軍の事、よく判ってますねえ」

「判っているというより、つまらない推測ですよ。ヒマなので」

「またまた」

シンとヨナはすっかり仲良くなっていた。

「エレイズ上將軍には、今度会う時は黒のドレスが良いと言っておきますから。勿論、僕の見立てとして。ユエ大將軍には秘密にしておきましょうね」

くすくす笑うシン。ユエがヨナに、

「彼女には黒が似合うと思うんだ」

と言っていたという話を聞いたのだ。

「それから、今度は髪を下ろすように言ってみてください。あの馬鹿兄……失礼、は、ひたすらエレイズ上將軍の髪の手触りを気にしていましたから」

「あはは！ 言っておきます。髪ってところが控えめですねえ。ふふ、馬鹿兄……」

「我が兄ながら、普段は非常に聡明な人物なのですがエレイズ上將軍の事となると」

ヨナは肩をすくめたが、その笑みをたたえた瞳は優しかった。

*

- - - s i d e エレイズ

「ねえ、シン、一週間後の予定は？」

「少々お待ち下さい……何もありません。何か、ご予定でも？」

エレイズはちよつと照れたようにさつきシンが渡した封筒をひらひらさせた。また、招待状が来たというわけだ。これは、シンもヨナを通じて知っていた。だからスケジュール調整をして一週間後を空きにしたのだった。

「行つてらっしゃいませ」

「うん。また、あんな感じでいいのかな」

「服装ですか？」

「うん……」

シンは台本通りに喋る。

「僕の素人考えですが、エレイズ様の銀色の髪には黒い服が似合うと思います。それから、髪はお背中に垂らした方が服とのコントラ

ストが明確になって宜しいかと」

エレイズはちょっと吃驚したようにシンを見た。

「どこで、そんなの覚えたの？」

「秘密です」

ヨナの入れ知恵である。彼は、理論的に女性の事をよく判っているから恋人だつて出来るとシンは思うのだが……本人にその気が無ければ、可能だとも思っていないようだ。

「上官に隠し事？ まあ、いいや……。じゃあ従おうかなあ。

でも、そんなに何着もドレス持ってない……」

「ご心配なく。あの日から侍女達が増産していましたので」

エレイズは紅茶を吹きそうになった。

「何を期待してるの、あの人達は」

「ふふ、判っていらっしやるんでしょう？ 僕も期待しています」

耳まで真っ赤になったエレイズを見て、これはいけると確信したシンだった。

「もう少し、自信を持ったらどうです？ 兄さん」

「でも嫌われるのが怖いじゃないか……」

「大丈夫です。兄さんを嫌う者なんて、相当性根が曲がった人間ですから。そんな人とは付き合わない方が寧ろいいくらいですが、エレイズ上將軍は部下からの信頼も厚い方。気むずかしそうに見えたとして、性根は真っ直ぐな方のはずですよ」

ヨナはこのところ、ユエを元気づけるのが相当に上手くなってきた。……というのも、今までそうならなかったのはユエの気持ちが悪く落ち込むことなど、エレイズに出会うまでは1年に数度となかったからである。

「本当にそうかな」

「強気になってください。そんな調子では、気の弱い男と見られてしまいますよ。」

エレイズ上將軍は、軍人なのです。上品な方ですが、それと気が弱いのは話が別です。自分より弱い男には興味を持たないでしょう」

ユエはヨナをじっと見て、真剣に頷いた。

「判った。弱みは見せない」

「ええ、その意気です」

まるで、決闘に送り出すようだなとヨナはちよっと思った。

*

第一回は成功を収めたので、今日も同じ店に入った。客は当然、同じ者はいないわけだが店員はしっかり覚えていて

『まさか、正式にお付き合い？』

などと、勘ぐっていた。お客様に冷たい視線を浴びせるわけにはいかない女性店員達は、示し合わせて男性店員に給仕を行わせた。

「それにしても」

ユエは、驚いていた。

「実は、エレイズには黒が似合うと思ってたんだ。そうしたら黒を着ているし、想像以上によく似合ってるから驚いたよ」

「……シンがどこかで覚えてきたらしくて」

エレイズは、今日は首もとの詰まったローブにも近い形のドレスを着ている。袖が無い代わり、レース地の上品な長い肘まである手袋で腕を飾っている。髪は侍女達が大喜びで梳り、サラサラとしてユエにも負けぬ輝きを放っていた。

「はは、シン君は何でも良く判ってる。ほんとに12歳かな」

「時々、信じられないですよ。毎日会ってても」

小さく笑い合った。

「本当に、今の軍は危険だよ」

溜息と共にユエはそう言う。

「内乱だとか、そういう事じゃない」

「判ります。本来、国を守護するべき軍部が……ユエ大將軍のような一部の例外を除き、戦力ではなく権力のたまり場になっている……。これでは、腐食剤を抱えているのと同じです」

エレイズの言葉にユエはしかと頷く。軍の話はともかく、政治の話させるとエレイズの方がユエより何枚か上手だ。だが、幸いにもユエは自分より知恵のある者の言葉を聞いて感心できる寛容さを持つていた。

エレイズは続ける。

「国内が強固であるのに、外部からの攻撃を受け、それだけで滅びる国というのはまずありません。ですが、その逆なら往々にある。内部の腐敗が、外部からの脅威を助長する結果になってしまうんです」

「そして、国家というものは必ず、上から下へと腐敗が進む。腐敗を止めたければ、上をどうにかするしかない」

「ユエ大將軍の仰る通りです」

今日一番、彼らが力を込めた話が軍の腐敗についてだと知ったら、ヨナはともかくシンはさぞかしガツカリするだろう。だが、ユエとエレイズはどうやら趣味やら人間関係、または艶めいた話をするよりも軍事・政治論を語り合う方がよほど相手と心的距離を詰める事が出来る人間性だったのだ。

エレイズは今日、今までは、武力と人気があるだけだと思っていたユエに思った以上の思考の柔軟性と意思の固さがある事を知り、ユエもエレイズが唯、生意気な政治論を振りかざすだけの武官ではない事を知った。互いの美しさを認め合う事よりも、魂の高潔さを知るほうが余程、彼らにとっては収穫であり、関係性の前進であった。

*

- - - side ヨナwithシン

「あれから半年ですか」

シンは、図書館の近くに小さな部屋を借りて住んでいるヨナの元を訪ねていた。半年経ち、正真正銘の弟と弟みたいな小姓はとても仲良くなっていたのだった。

「計4回……まあ、兄さんの遠征があったり国境付近で不穏な動きがあったのだから仕方ありませんが。ちょっと少ない気がしますね」

「ですよねえ。というか、ここらでエレイズ上將軍から動いて欲しいです。女性から誘うのははしたないとかいう、原始的思考を持っていらっしやる訳が無いと思うんですけど」

「確かに、彼女の考え方はラジカルといえますね。まあ恐らく、照れていらっしやるのでしょ」

ヨナの部屋なのだが、紅茶を淹れるのはシンだ。年齢関係だとかではなく、単にシンの紅茶を淹れる腕前が最高級だからである。比べてしまうから外で紅茶を飲めないのが悩みだとエレイズが以前、冗談めかしていたのだが……ヨナは今や全面的に肯定する。外で紅茶を飲まなくなった。飲んでも、美味しい気がしないのだ。

「僕、動いてみます」

「ほう？」

シンは、決意を固めた瞳を見せた。

「エレイズ上將軍に、自分からお食事に誘うようにと。そして、場所は育てのご両親の料亭にするようにと。そろそろ、有給とって帰ろうかなとぼやいてらっしやったので」

「成る程、それではよろしく申し上げます。いつ頃になるでしょう？」

「うーん、恐らく、今月中ですね」

「判りました。今月中は、必要以外の予定を入れないように言っておきます」

「お願いします」

とはいっても、ユエはこのところ仕事以外の予定というものを一切持っていない。女性に誘われた場合は勿論、男性同士の付き合っても大抵断っているようだ。……いつでも、予定が許せばエレイズと会えるように。涙ぐましい努力である、とヨナはいつも感心を通り越して感動しているのだった。

---side シン

シンはエレイズの執務室にいつも通り紅茶を淹れていた。ものの次いで、という風に口火を切る。

「そういえば、ご実家に帰ろうと、仰ってましたよね？」

「うん。この前、時間があれば帰って来いって手紙が来たからね。時間ならありそうだから」

そう言う、エレイズは何となく楽しげであった。血の繋がった家族でなくとも、料亭の夫婦は他の何にも代え難い彼女の両親なのだ。

「シンも行く？」

「お誘いありがとうございます。でも、僕よりもユエ大將軍を誘ってはどうぞです」

エレイズは困ったように頭へ手をやった。

「でもなあ」

“友人”を家族に紹介したとて、不自然ではありませんよ」

シンの暗に言いたい事を理解して、今度は溜息をつくエレイズだった。

「好きだねえ」

「……あの」

シンは紅茶を淹れ終えて、エレイズのデスクに置くと改まった。

「何？」

「エレイズ様は実際、ユエ大將軍の事をどう思っているんでしょうか？」

エレイズは紅茶を飲みかけて、固まった。

それはもう、氷結呪文を使われたかのように固まった。

「……エレイズ様？」

「考えた事、無かった」

「……え……ええっ!？」

じよ、冗談ですよね？ エレイズ様っ。あはは、お人が悪いなあ」

「いや、ほんとに」

エレイズは深刻そうな表情で言った。

「どうなんだと思う？」

「それを聞きますか!？」

シンは動揺の余り、敬愛する上司に思いつきり突っ込んだ。幸い、エレイズはそういう事を気にしない。

「そもそも、恋って何？」

「そ……それは。」

一般的には男女が互いに好意を持つ事を言うのかと

「私、シンの事大好き」

「恐縮です」

「シンは？」

「それはもう、此の世で一番の方と思っています」

「これ、恋？」

「違います」

エレイズは本当に、「訳わからん」という風に首を傾げる。

仕方ないので、シンは半ばヤケになって自説を披露する。

「宜しいですか、この場合を恋と呼ぶはないのは何故かといいますと、エレイズ様は僕が男だから好きなのではなく、僕はエレイズ様が女だから敬愛しているのではないからです」

「うっ……ん」

「僕は例えば、エレイズ様が天を突くような大男であっても同じように尊敬申し上げるでしょうし。エレイズ様も、例えば僕が少女であっても問題を感じないはずですよ」

「そう言われればそうなのかなあ」

些か極論である事は否めないが、概ね正しいだろう。

「恋はこれと違つと、僕は思うのです。

ユエ大將軍にとっては、エレイズ様は女性でなくてはならないのです」

「……へ？」

シンは、そもそも核心を突かない気は無かった。

「ユエ將軍は、軍人としては勿論の事でしょうが、女性としてもエレイズ様の魅力の虜になつておられる。僕はこれを、ユエ大將軍はエレイズ様に恋してらっしゃる……と表現します」

エレイズは、しばらく絶句していた。

5 (前書き)

書けば書けるものです。まあ、更新ペースはだらだらとするでしようから……気長にお付き合ってくださいませ

---side エレイズ

本当に楽しそうだと……エレイズは半ば感心していた。

エレイズは言った通りに有給休暇を取って、“実家”に帰る事にしてその途中である。馬車が通れないような細道を幾つも通らなくてはならないので馬に乗っての移動だ。

煉瓦も敷かれていない茶色い土が剥き出しになった道は、目に鮮やかな緑色で包まれた田畑で色取られている。天候にも恵まれ、非常にのどかな風景だ。

真っ黒な美しい毛並みの馬をぼくぼくと歩かせているエレイズの横で、同じ速度で茶色の馬を歩かせているのは大將軍ユエだ。シンの勧めに従って、誘ってみると一も二もなく「行く」という即答が帰ってきたので仕事は大丈夫か聞いてしまったほどだ。

そのユエは終始、ずっと良い笑顔である。

『シンが言ってた事、ほんとみたいだなア』

さて自分はどうしようかと、そればかり考えていた。

「いつもこうやって馬で？」

ユエが声を掛けてきたので、正直に話す。何も、上品ぶる必要はな

い。

「いえ、いつもはアイス・ウルフで」

「ああ……相当早いよなあ」

「ええ。体力も私の魔力とイコールなので、道中全力疾走できますから」

ユエは明るく笑った。

「ほんとに君はたのもしいだから」

「……馬鹿にしています?」

「まさか! ……とすると、迷惑だったかな」

「いいですよ。急いで帰らなきゃいけないわけでもないのです」

4、5時間の違いである。どうしても半日は必要になるのだから、時間についてはあまり気にしていなかった。エレイズの城が田舎の真っ直中にあるため半日で済むが、王都から帰るとなれば、もう殆ど旅のようなものとなる。

「こちらこそ、こんな遠出に誘って申し訳ないです」

謝るのはこちらというわけだ。

「君の誘いならどこにでも行くよ」

「……そう、ですか」

この短い旅で何度目かの殺し文句がきた。誰がけしかけたのか、随分と発言が積極的になったというか遠慮が無くなっている気がする。周りに人っ子一人いない、のどかな田園地方だからだろうか。

また、その笑顔は凶器の一種であると思う。

- - - side ヨナ

ヨナは王立図書館での仕事が一段落ついた頃だった。小1時間の休憩時間中、兄は今頃どうしているかなと考えてみる。

『まあ、あの調子なら。終始、最高の笑顔なのだろうな』

エレイズからの手紙が来たときの、彼のテンションはもう凄かった。ヨナはその見た目の通り、アルコールに弱いから滅多に口にしないのだが宴会もかくやというハイテンションの兄に結局付き合って、酔いつぶれた。酔いつぶれたといっても、眠りに落ちただけであるが。断じて人に迷惑はかけていない。

『実家によばれるという事はある程度以上の好意を持たれているのでしょうか。積極的に出てみてもいいのではないですか？』

と言ってみたが。どうなっていることやら。

ヨナとしては、さっさと正式に付き合ってもらい、彼の仕事でも何

も関わらずやってくる町娘達の

「ユエ大將軍とエレイズ上將軍の仲ってどうなってるんですか!？」
という質問から解放されたい。1人に

「ああ、正式にお付き合いしていますよ」

とさえ言ってしまうは噂が簡単に広がって質問者がいなくなるはずなのだ。市井とはそういうものだ。

--- side エレイズ&ユエ

「ここです」

エレイズがそう言つて馬を止めた。ここは既に、かなり深く森の中へと分け入った場所。木々の所為で少し薄暗かったがそこは広場のようになつていて暮れかけている空がよく見えた。広場の奥にぼつんとある木製の家。対象物が無いので判りにくいだが、王都の狭い土地にある料亭よりはよほど大きい。中から温かい光が漏れ、また良い匂いもする。

「華やかでもない郷土料理ですけど……味は保証します」

そう言つたエレイズは、馬を降りると手綱を手頃な木に結びつけた。馬小屋はないのだ。

「楽しみだな」

にっこりとしたユエも、それに倣った。

2人が並んで店に入ると、既に何名かの客が入っていた。そこで
ときばきと料理を運んだり、客達とテンポの良い会話をしている初
老の女性にエレイズは声を掛けた。

「母さん！」

「まあエレイズ……エレイズ！？ あらあら、お帰りなさい！ そ
の方はだあれ？ 何て素敵なの！」

物凄い勢いで駆け寄ってきたエレイズの母、エミリアにユエは微笑
んで挨拶した。

「レミュエル王国大將軍のユエと申します。エレイズとは大体1年
前からお付き合いさせてもらってます」

「ま！ お付き合い！」

「いや、友人付き合いだから」

エミリアは聞いているか否か。ふっくらとした頬を赤く染めて、大
きな声で店の奥に叫ぶ。

「あなた、あなた！ ちょっといらっしやいな！」

「何だ？ おお、エレイズか。お帰り」

「ただいま」

父、ダニエルは人の好きそうな笑顔を浮かべてやってきた。この店では彼が調理担当である。眼鏡をかけた感じの良いダニエルと、ふつくらとして優しそうなエレミアが並ぶだけでこの店の雰囲気判るといふものだ。

「いいから座りなさい。疲れてるだろう？ いやあ遙々よく帰ってきたね。」

そちらは？」

「ユエ大將軍」

「へえ……へ！？」

ダニエルはぽかーんとユエを見た。相変わらず、凄まじくイイ笑顔のユエは礼儀正しく一礼してから

「ユエと申します」

と名乗った。

「エ、エレイズ、後でその話はしような。まあ、まず食べなさい。ね、うんそうだ、そうだ……」

「あらあら、てんぱっちゃって！」

エレミアはダニエルの狼狽を見て笑いながら

「ま、こんなに素敵な人が来たらねえ。追い返せもしないわね」

とユエにウインクして2人を席に座らせた。

「食べたいものはある？」

「いつも通り任せる」

「はいはい。ユエさんも少し待ってらしてね」

「お世話になります」

完全に勘違いしている両親であった。

「すみません。後でよく言っておきますから」

勘違いしたまま、いつも以上に気合いを入れて食事の支度をしている両親を見てエレイズは苦笑した。それに対して艶やかな笑みを浮かべるユエ。

「勘違いしてくれたままでも俺にとってはいいけどね」

「……どうかしたんですか」

「うん。遠慮はやめたんだ」

そこへ料理が運ばれてきたので、話はそれへと移っていったが。エ

レイズはしばらく困惑したままだった。

華やかさはないが、味は保証できるというエレイズの言葉は間違っていないかった。夫婦が毎朝摘んでくる新鮮な香草や、自分達の畑で育てている色とりどりの野菜。育ちも都の方であるユエにとって、見たこともない野菜が多かったが流石ここで育っただけあるエレイズがきちんと解説してくれた。

この料亭がある森を王都側と反対に抜けたところにある広い牧場で育った名物牛の肉の甘辛い味付けはとても食べやすい。

「魚は父さんが釣ってきたものなんですよ」

「この近くに川が？」

「湖です。リーナ湖といって……知名度は低いですが、綺麗なところですよ。今日なんか、天気もいいし風もないし……月がよく映えてるんじゃないかな」

その後は、殆ど無意識に口にした。

「見に行きますか？」

驚いた顔をしたユエを見て、自分の言った内容を思い出した。雪のような色をした頬を紅くしてしまった。

「じゃあ、連れてってもらおうかな」

あまりにも嬉しそうなので、冗談とは今更言えまい。

『まあ……いいか』

久しぶりに、気に入りの場所に行きたかったのも確かだ。

5 (後書き)

田舎のおばさんとおじさん書くの大好きWWW

6 (前書き)

真面目に恋愛事情一本は書けませんよ、はい。ギャグ的場面(ご夫婦)をねじこんで、陰謀編をねじこんで、戦争までやらないとやっていけない(笑)。気合いが保たない。

- - - side エレイズ

料亭から数分歩いたところにある、広い湖。ふんわりとした優しい風が控えめな波を作っている。頭上には丁度月が昇っており、円形に近い湖の中心に青白い月光を落とす。湖を囲むように立ち並ぶ木々の葉や枝がほんの僅か、風に動く音。そんなに遠くへ来たわけでもないのに、まるで世界から切り離された空間のようにさえ感じる静けさ。

ここが、リーナ湖。子供時代、1人でこっそり夜半に家を抜け出して月を眺めるのが好きだったエレイズは今、思いがけぬほどこの風景が似合う友人とここにいます。……友人、だろうか。

青白い光を受けて輝く、射干玉ぬばたまのような髪髪に触れてみたいと思った。半ば無意識に手を伸ばすとその手が捕まった。

「すみません……ええと」

怒られるかと思いきや、湖に女神が住んでいたのなら彼女が嫉妬して溺れさせてしまうような美しい人は優しく笑った。そして、片方の手でエレイズの頭を撫でた。

「俺が先だよ」

そんなに丁寧にしなくても良いと思えるほど優しく、銀色の髪が美しい指に梳かれる。

「綺麗な髪……月の色だね」

「ユエ大將軍の髪は、夜空みたい」

月の光を受けて時々、きらきらと輝く様は夜空に星が瞬くのに似ていた。横に並んでいたがエレイズはユエの前に立って自分もその夜空の髪に触れた。

「それなら」

ユエは髪からそっと手を離すと、優しい動作で目の前の人を抱きしめた。

「月と夜は共にあるべきじゃないかな」

「……ずっと？」

「ずっと。嫌？」

エレイズの中にくすぶっていた疑問は、もう無くなっていた。

考え直せば、ずっとそうだったのに。自分には有り得ないと思っていたのかもしれない。それに、こんな人が自分に特別な想いを持ってくれているという自信が持てなかったから。心に向き合って失望するより、心を騙す事を選んでいたのかもしれない。

「嬉しい」

正直に言えた。

「ご両親の勘違いを本当にしちやおうか？」

ユエは悪戯っぽく笑った。もう、迷いの無いエレイズは相手の腕を抱きしめた。

「後悔しない？」

「絶対にしない」

微笑み合うと、まるで何年もそうしてきたかのように自然に手を握り合って料亭へと戻っていった。

……エレミア&ダニエル

エレミアとダニエルは、いつもより少し早く店じまいにして客間を大急ぎで整えていた。

「はあ……エレイズもとうとう……」

「なにを今更落ち込んでるの！ 世界一綺麗な我らが娘よ？ 今までそんな話が無かったのがおかしいくらいだわ。こんな私が結婚できてるんだもの」

「お前も綺麗だったよ」

「まあ！……って、何で過去形なのよ！」

しかし、ダニエルはエレミアの発言そっちのけである。さっきから無駄にクッションの置き場所を動かし続けている。

「あなた、クッションはもういいから！ お酒……はよくないわね。大事な話だもの。お茶を淹れてきてちょうだい！ 少しは気が紛れるでしょう」

「うん……そうだな」

完全に「お父さん寂しい」の状態になっているダニエルを、腰に手を当ててぱっぱと追い出しながらエレミアは室内を歩き回って厳しいチェックを行う。

「もうしめたの？」

帰ってきたエレイズとユエを迎えたエレミアに、娘はちよつと驚いたように言った。

「折角あなたが帰ってきたし、ユエさんをきちんとお出迎えしないといけないからね。それと、大事な話もあるんでしょ？」

エレミアがウインクを飛ばしたので、2人は苦笑した。

*

．．．side シン＆ヨナ

「ヨナさん！　とうとうですねっ、聞きましたか!？」

「ええシン君、長かったですね」

シンとヨナはがちりと握手をかわした。エレイズとユエが宿泊日数を伸ばして4日後に帰ってきて、その翌日だ。シンはヨナの職場ではなくもはや寮に直行したのだった。

「婚約ですか」

ヨナはしみじみと言った。

「頑張りましたね、兄さん……」

「ヨナさん、泣いています」

「シン君も潤んでますよ」

2人は再び、実はもう何回目か判らない握手をかわした。

「結婚はいつ……?」

「それがですね」

ヨナは苦笑した。

「上將軍にはまだ届いていない通達なのですが、大將軍の兄のところには届いています……私もさっき兄に会って、知ったのですが」

「？」

「レミュエルは近々、国境に大規模な兵の動員を行うそうです」

「戦争という事ですか？」

ヨナは頷いた。

「兄は確実に……そして恐らく、エレイズ殿の軍も動員される事でしょう。それが終わってから、となりそうですね」

「まあ……あのお二人に何かある事は無いでしょう」

過信ともいえる言い種だが、これはヨナも同感であった。また戦績を見る限り、ユエを除いた大將軍の誰よりもエレイズ、そしてウオーレン、ラファインの実力が高い。この戦争が終わったなら、彼らが大將軍となる可能性さえあると考えていた。

*

ユエのもとに、国境線の知らせを持ってきたのは王城に仕える文官のダグラスだった。

「それから、ユエ大將軍」

ダグラスは言った。

「お時間はおありですか」

「ええ、何か？」

ユエは何となく、ダグラスを好きになれなかった。まず、その目……。暗いともまた違うが、何かを企んでいるもののそれだった。しかも決して良い企みではないだろうと予想される。口元に貼り付けたような笑みもどこか、詐欺師のようで。信頼の出来ないタイプだった。

出来ればさつさと帰ってほしいが、礼儀は大切にしなければならぬ。冷たくならないように心がけて先を促した。

「あなたは、この国の軍部に失望していらっしやる……そうでしょう？」

ユエの瞳の色は一瞬にして警戒に切り替わった。ダグラスもそれに気付いたようだったが、構わず語り始めた。彼、そして“とある大將軍”の計画……。

「それを、私に手伝えとおっしゃるのか」

「あくまでお願いです。断ってくださいって結構ですよ……簡単には諦めませんがね」

陽気に笑ったつもりだろうか。しかし、骸骨が笑っているような不気味でかさついた笑い声である。

「私が、この国の軍に失望している。どこから聞いたかは、存じませんがそれは事実です。しかし、私は決して暴力による解決は望み

ません」

「……説得で国が動くとお思いで？」

「国を変える方法は、暴力と言葉だけではありません。私はいずれ、今の上將軍達……ラファイン、ウォーレン、そしてエレイズがこの国の中心になってくれる。そう確信しています。勿論、私もそこに加わるつもりでいます。時間のかかる方法ですが、正しいやりかたで私はレミュエルの軍を正しい方向へ導きたい」

ダグラスは短い息を吐いた。

「交渉決裂ですか。しかし、いつかあなたも判るでしょう。この国の救いようのなさにね……」

その時は是非、お声を掛けてください」

「その日は来ないでしょう」

きつぱりと笑ったユエは立ち上がった。

「連絡、ご苦労様です。ただちに準備に移りますので」

「ええ、失礼します」

ユエは、ダグラスの事をヨナやエレイズに教えた方がよいか考えたが。下手に彼らの心配事を増やしても仕方がないし例え、ダグラスなどが直接的な手に出てもどうという事はない、という自負もあり記憶の隅に追いやってしまった。

『国王に進言するにしても、証拠が無いしな』

“とある大將軍”とやらの正体を掴んでからでも遅くはないと考えた。

これが、全ての不幸の始まりである。

7 (前書き)

段々、本編の内容と対応してきて番外編らしくなってきました(と思います)。

ダグラスの件もあり、精神的に絶好調とはいかなかったユエであるが戦中はいつも通り……つまり誰もが安心感を覚えるほどの冷静沈着な指導と本人の戦闘技術を見せた。その他、動員された2つの大將軍の軍は役に立ったとお世辞にも言えないがユエの予想通り、上將軍の軍の動きが素晴らしかった。

上位魔法使いの資格を既に持っている実力だけエリート、出身は平民の上將軍ウォーレンはとうとうアクア・ドラゴンの戦闘動員を可能にしたらしい。ウォーレン軍の矛先からは、悲鳴しか聞こえない。彼が来月の軍事会議を待たずとも大將軍に任命されるのは明らかだ。

また、エレイズ軍は遊撃隊として動いているがそれを本陣営と間違えかねない。使えぬ大將軍達の戦列が崩れ始めればすかさず躍り出て、騎乗して傍らに馬よりも巨大なアイス・ウルフを従えたエレイズ、燃えさかる蠶のフレイム・ホースに跨った副官リア、召喚獣は従えずに相手国ゴート……魔法よりも武芸を得意とする国……の一流戦士と見違う程の剣技で敵を圧倒している同じく副官セフィロがそれぞれ敵軍を一掃する。大將軍達が手柄を奪われたと怒りを覚えるならまだしも、諸手を挙げて喜び挙げ句の果てには不利な戦場を一任して崩壊しかけた敵軍に向かっていく様はかなり情けない。

ラファインの軍も、素晴らしい。奇策を弄するわけでもなければ、ウォーレンやエレイズの軍のように指導者が飛び抜けた実力を持っているようでもないが軍として一番、上手く機能しているのはラファイン軍だ。指揮系統が非常にしっかりしており、各人の実力が総じて高い。近接戦闘も巧みで、魔法国家と近接戦を舐めてかかった

相手国ゴートに動揺を与えている。

長引くかと思われた戦は、ものの数日で終了したのだった。

*

「祝勝パーティ？ 行かない」

エレイズはウォーレン、ラファインと撤収後に顔を合わせたかそう言った。

「俺も行かねーわ。疲れたし……てか、大將軍達役に立たねえ！」

「聞こえるよウォーレン」

エレイズが軽く注意した。

「ユエ大將軍だけだな……。我々がついていくべき力を持った方はラファインまでがそう眩く始末であった。

そこで、エレイズは「あ」と声を出した。

「どうした？」

「うん。ええと、ユエ大將軍と婚約したの」

「へえ……な……何iiiiiiiiiiiiっ!? ニ、ニニニ婚約っ
!?!」

「親より驚かないですよ」

「そうか、おめでとう」

「ありがとうラファイン」

ウォーレンは、戦ではちっとも息を切らさなかったのに今は盛大に肩で息をしている。

「幼なじみの俺はどこにいった!?!」

「この年になって幼なじみとか言わないですよ。恥ずかしい」

「うがっ」

「副官2人には言ったのか?」

と、ラファイン。

「うん。すぐに」

「どうせリアの奴は俺と同じ反応しただろ」

ウォーレンがそう言うも、

「ううん。涙ぐんで良かった……って。親みたいだね」

という返答。

「動揺したの俺だけ?」

エレイズはあっさり頷いた。

*

- - - side ユエ

「あなたとはあまり話したくないのですがね」

ユエは今や冷たい態度を隠そうともせず、招待者を見た。ここはダグラスの屋敷の客間。ユエの感情とは反対にとても良い天候で、室内はとても明るい。テーブルを挟んで向かい合わせに座っている。

「まあ、お茶をどうですか？ まさか毒でも入っているとお思いですかね」

「いえ」

そう答えたものの、手を付けないユエを見て努めて明るい様子で肩をすくめた。

「警戒してらっしゃる」

「あなたの所為ですよ」

「そうでした。ではごうしましょう」

ダグラスは躊躇いもなく、自分のカップに口を付けて一気に飲み干した。

「何なら、そちらも飲み干しましょうか？」

ユエは少し笑った。もともとが明るいタチである。陰険に、警戒しあっているのは苦手なのだ。

それに、少なくとも……先日の言い方を思い出せば彼が自分を殺そうとしているとは思えなかった。

「いいえ、失礼しました」

軽く口を付ける。

「それで、やはりこの前の話ですか」

「ええ、押して駄目なら引っ張ってみようかと」

「あなたの力くらいでは引っ張られませんかよ。軍人ですから」

ダグラスは陰気に笑った。

「まあそうですね。だから、あなたと腹を割って話せるくらいに仲良くなりたいのですよ」

「無理でしょう」

「これはこれは」

その後、ユエは少し驚いたが先日の話には全く触れずにダグラスは政治や軍事への不満をぶつぶつと漏らしていた。大いに同意する部分もあり、ダグラスの考察はなかなか面白かったので、気の乗らない相手ではあるが退屈はしなかった。

「もう一杯どうですかな」

「いただきますしょう」

ダグラスが侍女を呼び、紅茶を注ぐように言った。

侍女がポットを傾けた時……。

不意に、彼女の手からポットが滑り落ちた。高い音を立てて食器が割れる。

「ああっ、申し訳ありません！」

「大丈夫ですよ、そんな慌てないで」

泣きそうになって平謝りに謝る侍女に、謝られる数だけ「大丈夫」を返して、手伝いまで始めたユエをダグラスは、じっと見ていた。その手は、机の下にて奇妙な……空に文字を書くような動きをしていた。

- - - side ダグラス

その夜、ダグラスは今や通い慣れたとある邸宅に静かに入ってい

った。

「失礼します」

そこは、ウラデイス大將軍の屋敷である。

“とある大將軍”の正体だ。

「どうだった？」

自分にはワインを、相手には酒を好まないので紅茶を勧めると問いかけた。ダグラスは不敵に笑った。王城で仕事する彼しか知らぬ者は一様に驚くであろう表情であるが……これが彼の本当の性質に近い。

「上手くいきましたよ。全く以て、人が好い。仕掛けに利用した侍女の心配までしている始末です」

「……味方に欲しかったものだがな」

「無理でしょう。」

彼はともかく……聞きましたか、あのエレイズと婚約したとか」

ウラデイスは眉間に皺を寄せた。

機嫌が悪いと、色目を使って近寄ってくる政治家達に政治的難題をふっかけて、答えを諦めた相手に華麗なる模範解答を示す彼女は、実は少し有名である。

「あのエレイズか……身近にあの女がいるとなると、確かに難しい

な」

「ええ。しかも、弟はあの最年少王立図書館役員のヨナです」

「参謀長候補か」

ヨナはそう呼ばれている。

ますます、その周囲を含めて味方に引き入れる価値を持った人物なのだが、その周囲の所為で引き入れる事は不可能なのである。

「あの術は確実に効くのか」

「試験使用ですが……論理に間違いは無いはずです」

「お前が言うのなら大丈夫なのだろうな。……何故、様々な資格を取ってしまわない？」

「私のような者は、舐めてかかれるくらいが丁度良いのですよ」

「……わからんやつだな、いつも通り」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9980x/>

エレイズとユエ

2012年1月9日00時46分発行